

書 評

門脇佳吉著『道の形而上学
——芭蕉・道元・イエス——』
岩波書店、1990年4月、316頁

青 山 玄

ギリシャ的・主知主義の影響を濃厚に留めている西洋の神学に満足しきれずに、その長所は尊重しながらも、キリストが残した実践と教えの真髄を、東洋や日本の伝統的精神文化の側から理解し受容しようとする試みは、これまでにもいろいろな人々によってなされて来たが、本書ほど確信に満ちてこの試みを展開し、どんな批判にも屈しない力を備えていると思われるものは少ない、と言ってよいであろう。長年このような著作の出現を待望して来た筆者は、今まで「これではまだ西洋思想の厚い壁は破られず、西洋神学と対等にのびのびと展開する神学、限界を感知させられている西洋の聖書学や神学を根本から大きく刷新するような神学にはなり得ない」ともどかしく思うことが多かった。しかし、本書を読んで、あえて大きな表現の使用を許していただくなら、世界の神学界に漸く一条の希望の光がさし込んで来た、「これなら行ける」という喜びを深くした。

西洋思想を深く研究した著者は、参禅などにより、東洋の精神文化の流れの中にも実践的に降り立つよう努めたようで、1985年の『世紀』誌に「道の神学序説」と題し、12回に分けて連載した芭蕉や道元の思想の研究は、なかなか良く書けており、それは見出しや叙述の順序を多少変えて、殆どそのまま本書のIとIIに収録されている。芭蕉の人生観は「旅」の思想として解説し、道元の深遠な『正法眼藏』についても禅宗の視点から理解するのが普通で、本書のように、「人類と世界の歴史を動かす根源的原動力であり、究極目的である」（前置き8頁）生きている「道」の観点から「身読する」のは、真実の芭蕉や道元の思想をゆがめ兼ねない、と危惧する人も

いるであろう。しかし、著者のより広い世界的視座に立つなら、芭蕉や道元も同じ根源的に生かされ導かれていたことは否定し難いであろうし、彼らがその力にそれぞれどのように関わっていたかを追体験しつつ、そこからキリスト的な「道の形而上学」構築のための視点を学ぼうとすることも、容認してよいのではなからうか。

著者は本書の後半171頁を「III道の形而上学」と題する執筆に費やしているが、その内容は、前述した『世紀』誌に1986年から88年9月にかけて26回に分けて寄稿した「道の神学序説」を整理削減したものを中心に置いて、その前に、新しい序論とヨハネ福音書の根本視座についての考察を、その後、十字架から復活へのイエスのダイナミックな「活き」についての考察を加えたものである。芭蕉や道元の言葉から学んだ時と同様に、ここでも聖書の話の現場に身をおいて、神からの最も根本的な問いや招きを身読しようとする基本姿勢が特徴的である。そのため、聖書学者や神学者たちの最新の研究を利用してはいても、多くの学者たちとは異なる独特の聖書理解になっている箇所があり、著者は、さまざまな冷たい批判や白眼視を覚悟しなければならないように思う。

ことによると、著者がその視座の新しさを示すために、たとえば「活き」に「はたらき」あるいは「ロゴス」(60頁、147頁)、「道」に「キリスト」(142頁)のルビをつけたり、「超・対話」(57頁)、「超・沈黙」「超・悲しみ」「超・躍動」(285頁)などの新造語を使ったりした細事までも、そのような白眼視の的にされるかも知れない。しかし、著者がイエスや道元たちのように、ひたすら自分の中での神の「活き」に眼を向けて揺るがないならば、精神的行き詰まり打開の道を求めている東西の多くの学徒が、その行き方に啓発されて見習うようになり、西洋思想が構築した巨大な障壁も東西両方の側から案外早く撤去されて、新しい世界的精神の流れが始まるのを、期待できるではなからうか。

数百年来の巨大な壁に突破口を開けるには、本書IIIの叙述にもう一工夫も二工夫も必要で、もっと力強く現代人の心の目覚めを喚起するものにし

て欲しいが、本書はそのための一種の瀬踏みとして受け止め、多くの人の協力による著者の今後の活躍に期待したい。

追 記

本書が発行された直後の昨年4月中旬、岩波書店から本書とその書評依頼状が届かれた。筆者は、その書評が岩波書店発行の何かの小冊子に掲載されるのだと思い、早速上記の書評を書いて書店宛てに送ったが、岩波書店ではそれが『南山神学』に掲載されることを希望していたのだそうで、『南山神学』14号の発行までなお9ヶ月待つことを知らされると、キリスト教関係の小冊子に載せてもらえないものかと交渉してくれたが、結局やはり『南山神学』に掲載して欲しいと送り返して来た。

筆者はその間に、昨年2月発行の『岩波講座 転換期における人間 9』所収の同じ筆者の論文「一神教と多神教」を読むことができた。キリスト教と日本の伝統的精神文化との接点をあきらかにし、カトリックの神学ならびに霊性と日本人の宗教心との新たな発展の道を模索するという意味では、この論文も本書と同じ視点に立っており、本書とあわせて読むべきものと思うので、戻されたこの書評にそのことを書き加えることができるのを、筆者はむしろ嬉しく思った。

論者は、上智大学東洋宗教研究所で20年前から日本の諸宗教とキリスト教との対話に関係しており、中でも神道との対話には、当初から大きな関心を持っていたという。それで「一神教と多神教」においては、紙幅に制約もあるので、もっぱらキリスト教と神道に問題を限定して論じている。この論文よりも前に書いた『道の形而上学』においては、まだ多少中間発表的で、的確な表現や説明の仕方を模索しながら、もじもじしているような所が感じられた。特に道元の「道の形而上学」についての叙述あたりにその感を深くし、もっと読者に強く訴える叙述の仕方をして欲しいと思った所もあったが、全く新しい奥深い問題に取り組み始めた思想家は、初めのうちはそのような話し方で良いのだ、そのブレを大目に見てあげなけれ

ば、などと思い直していた。しかし、「一神教と多神教」においては、論者は既に、キリスト教と神道とが一致共存して新しい人類共同体創造のために働く道を、確信をもって見いだしている、という印象を与えており、その叙述にも読者に強く訴える力がこもっている。

例えば「御言が肉になられたのは、人間を神々とするためである」という聖イレネオの言葉その他を引用して、「キリスト教は神道が多神教であると言う以上に、より優れた意味において多神教となるのである」(同論文 84 頁)と喝破したり、「ヘレニズムの影響の下に理性主義に偏し、原始的心性とそのエネルギーを全く軽蔑し、人間の意識面だけを教義で合理化した結果、西洋でも日本でも民衆の心を魅了し得る、活力に満ちた宗教になりえないでいる」キリスト教が、神の言葉を「人間の言葉の如く意識のレベルに引き下げて」しまい、それが本来人間の心身全体を躍動させる根源的成力であることを忘れて、などと手厳しく批判したり(91~92 頁)する大胆さに、『道の形而上学』を執筆していた頃よりも一段と逞しくなった論者の確信が感じられるが、筆者は、ここに日本の神学の萌芽もある、という喜びを新たにした。

他方、論者は神道に対しても、その「狭い民族主義を脱却し、「世界的視野を獲得」するには、父性原理を一神教から学ばなければならない、このままでは、神道は現代日本の精神的安定を脅かして、内部から崩壊させ兼ねない、その日本的「身内意識」は世界の平和共存の障害になる(92~93 頁)などと、かなり強い姿勢で要求を掲げており、これも、論者が既に新しい道を確信をもって見いだしている徴しと見てよいであろう。

『道の形而上学』は、それなりに独自の優れた研究であるが、この論文と比べながら振りかえって見ると、スケールが大きくて、手を入れ煮詰めるべき余地を多く残しているように思われる。仏教者、特に禅僧には斜めに構えているような横顔もあって、一筋縄ですんなりと問題を解決し難い側面があろうし、2千年間数々の紆余曲折を経て発展して来たキリスト教にも、そう単純には原初の創造的エネルギー体験に立ち帰らせない、巨大

な流れの勢いというものがある。それらの困難に耐えて著者の思想を定着させるには、提起される無数の異論反論に誠実に対応しながら、黙々と幅広く根を張り、実践的成果を提示する必要がある。筆者の今後の活躍に、明るい希望の心で大いに期待したい。